

「みこころに適う礼拝を求めて」

ローマ 12:1-2

【1】恵みによって

私たちが学んでいること、私たちの信仰は実践に移されなければ意味がない。実際の行動を信じていることに合わせなくてはならないのである。しかし、パウロはいきなり実践的な勧めをしているわけではない。

1節「ですから、」とあるようにこれまで十分に神のあわれみ、神の恵みが語られてきた。この神の恵みに基づいて私たちの実践が勧められているのである。パウロは11章まで神の恵みを語り、12章からはその恵みに対する応答がどのようなものであるのかを述べているのである。

キリスト者の生活はキリスト教の伝統や規則を守ることや徳目に励むというものでもない。私たちが、どう生きるべきかということは、私たち自信から出てくることではなく、神が私たちのために何をなしてくださったかというところから出てくることなのである。

何よりも私たちはイエス・キリストの十字架に立ち返らなければならないのである。そして礼拝とは、神の力により頼みながら神の恵みに応答することであると言える。

【2】いけにえと礼拝

1節のみことばは、旧約時代の祭司たちの礼拝の姿を思い起こさせる。すなわち、礼拝には「ささげ物」が不可欠であったということである。旧約時代においては、いけにえの規定があったが、新約の時代の今、その規定はないが「私たちのすべて」をささげること神は求めておられるのである。

「からだ」とは、私たちの全人格を

指すものである。それゆえに礼拝は極めて現実的である。私たちの日常と区別できるものではない。私たちの身体も心もそのすべてにおいていつでも、どこでも、何をしていても神の恵み、愛に応答した生き方が求められているのである。

【3】心新たに

そのような礼拝の具体的、実践を2節は教えている。私たちはすべてを神にささげる礼拝によって、変えられるのである。自分を神にささげていくことによって丁度ラジオのチューニングが合わせられていくように、私たちの心と神の心が一つとされていくのである。よって、もしクリスチャンが礼拝を軽んじるとするならば、それはチューニングが合わなくなり、雑音が入り、役割を果たすことができなくなってしまうのである。

「この世と調子を合わせてはいけません。」とは、まさに私たちのチューニングがどこに合っているかということが問われているのである。私たちの日常は懸命に世が私たちを取り囲み、私たちもその世に合わせよと責められている。だからパウロは、この世に流されるままに調子を合わせ続けるのではなく、意識して「心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。」と言うのである。

しかし、私たちは自分で自分を変えることは不可能である。だからこそ、古い自分を捨て、人生の価値観をこれまでのものから神ご自身に変更し、神によって変えていただくのである。

私たちのすべては神の恵みに依存しているのである。だからこそ、いつも意識して神の恵みを覚えなければならない。礼拝はそのようなものである。